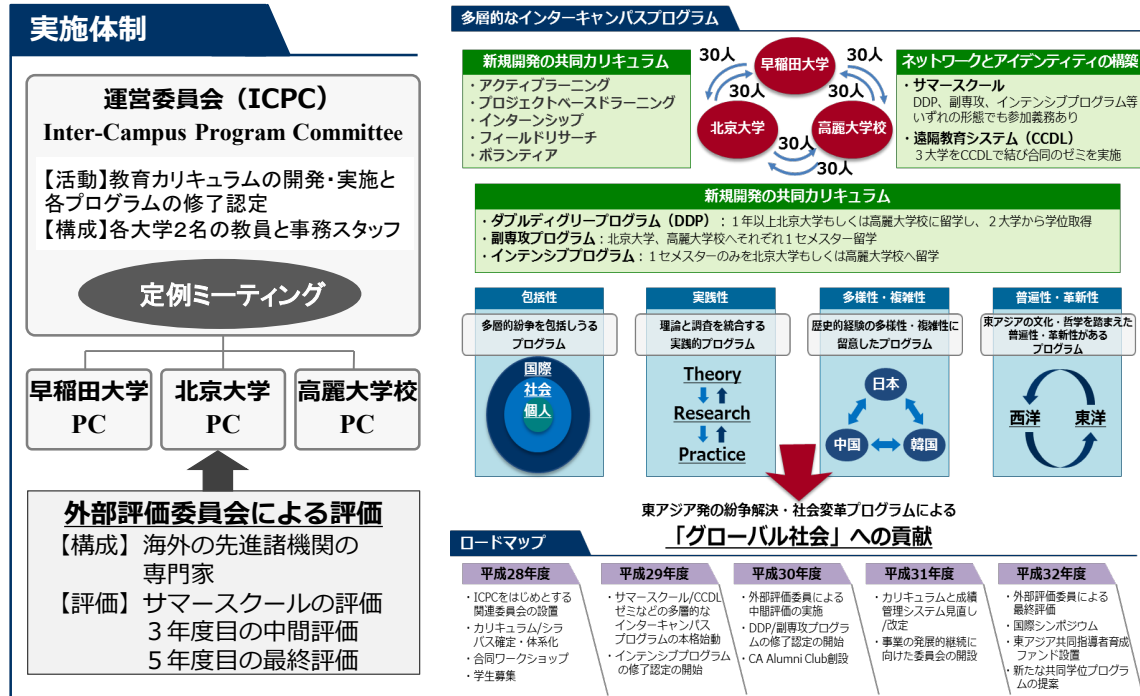


大学の世界展開力強化事業(平成28年度採択) 早稲田大学 取組概要

【事業の名称】(選定年度28年度・(タイプA-②) CAMPUS Asia))
 「多層的紛争解決・社会変革のためのグローバルリーダー共同育成プログラム」

【事業の概要】

本事業は、軍事衝突だけでなく、経済格差や差別問題、環境破壊など、国際、社会、個人など、多層的な次元で生ずるさまざまな対立や葛藤を包括する「紛争」の解決のための新たなグローバルリーダー育成プログラムである。早稲田大学・北京大学・高麗大学校の三大学は共同でアクティブラーニングやプロジェクトベースラーニング、インターンシップやフィールドリサーチなど新しい教育手法を積極的に導入し、多層的なインターキャンパスプログラムを通じて実践的な人材を育成するとともに東アジアの次世代リーダーとしてのネットワークとアイデンティティの構築を支援する。



【交流プログラムの概要】

早稲田大学、北京大学、高麗大学校の三大学は、ダブルディグリープログラム、副専攻プログラム、インテンシブプログラムのそれぞれに対して同数の学生を交換し、また合同ワークショップやサマースクール(ウインタースクール)を通じ、共同して教育カリキュラムの開発と実施にあたる。

<ダブルディグリープログラム>

協定大学のいずれかに1年間留学し、留学先大学の学位を取得する1年間の留学プログラム。

<副専攻プログラム>

協定大学にそれぞれ1セメスターずつ留学する、合わせて1年間の留学プログラム。

<インテンシブプログラム>

協定大学のいずれかに1セメスター留学する、6か月間の留学プログラム。

【本事業で養成する人材像】

社会変革力: 様々なレベルの紛争に積極的にコミットしその解決を通じて社会の変革に貢献したいという強い意欲を持つ人材。

相互理解力: 多様な意見や政治的立場、文化や歴史の差異について豊かな感受性と理解力をもつ人材。

調査分析力: 紛争が生じている現状とその理由について専門的知見とそれを調査分析する方法論を有する人材。

実践応用力: キャンパスで学んだ知識を社会の変革に役立てていく実践的な応用力を有する人材。

【本事業の特徴】

紛争解決のための人材育成プログラムに関しては、これまで欧米の諸大学が熱心にその開発と実践に取り組んできたのに対し、日本を含む東アジアでは、いまだ十分に社会に根を張るに至っていない。本事業では、世界のあらゆる地域で発生するさまざまな紛争に対して、東アジアの歴史と文化に立脚した新しい紛争解決のためのグローバルリーダー育成プログラムを開発・実践し、人材育成を通じて紛争解決、社会変革への国際的貢献をなす。

【交流予定人数】

	H28	H29	H30	H31	H32
日本(J)での受入	C 5 K 5	C 15 K 15	C 20 K 20	C 30 K 30	C 30 K 30
中国(C)での受入	J 5 K 5	J 15 K 15	J 20 K 20	J 30 K 30	J 30 K 30
韓国(K)での受入	J 5 C 5	J 15 C 15	J 20 C 20	J 30 C 30	J 30 C 30

1. 取組内容の進捗状況(平成28年度)

【早稲田大学】

【事業の名称】(選定年度28年度・(タイプA-②) CAMPUS Asia)

「多層的紛争解決・社会変革のためのグローバルリーダー共同育成プログラム」

■ 交流プログラムの実施状況

事業の開始が10月31日からとなったため、実質的な交換留学プログラムの開始は平成29年度以降となった。その一方で2回のICPCにおいて3大学共同での新カリキュラムの開発・設置および交換留学プログラムについてのすり合わせを行い、学内では学生に対してキャンパス・アジアの留学プログラムに関する説明会を行った。また事業のHP、Facebook、Twitterを立ち上げ、新たな留学プログラムの広報を行った。

各大学の参加学生間での交流について協議を進め、その成果として4月19日に高麗大学校のキャンパス・アジア参加学生を日本に招き、早稲田大学のキャンパス・アジア参加学生との交流を実現した。



〈2017.4.3 キャンパス・アジア 新生向け説明会〉



〈2017.4.19 交流する日中韓の学生と大学関係者〉

交流プログラムにおける学生のモビリティ

- 日本人学生の派遣
- 外国人留学生の受入

平成28年度においては、派遣・受入ともに実績はなし。

	H28
日本(J)での受入	C 0 K 0
中国(C)での受入	J 0 K 0
韓国(K)での受入	J 0 C 0

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- ・各大学にPCを設置するとともに、三大学合同でICPC(各大学2名の教員とスタッフにより構成)を設置し、第1回を北京大学にて、第2回を遠隔会議システムを活用し実施した。平成29年度4月には早稲田大学にて第3回を実施している。
- ・先進諸機関より専門家を招聘・あるいは訪問し、外部評価委員会への就任依頼の可能性を模索した。
- ・カリキュラムとシラバスの確定を推し進めた。
- ・新しい教育手法の導入に向けた合同ワークショップを準備し、4月19日の開催に至った。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

本事業のホームページ(日本語・英語)を立ち上げ、Facebook、TwitterといったSNSと並行して日英併記で広く内外に情報を発信した。留学前の外国人学生や留学中の日本人学生もこうした情報媒体を通じて常に最新の情報にアクセスすることができ、またホームページを通じていつでも事業に関する質問をすることができる環境を整えた。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況 情報の公開、成果の普及

- ・本事業のために英語力に優れた職員を1名雇用するとともに、学部事務局・国際部・留学センターが密接に協力・連携しつつ、内部チェック機能を有する相互補完的な運営体制を構築。
- ・外部からの事業チェック機能として、外部評価委員会の立ち上げを準備。
- ・HP、Facebook、Twitterを立ち上げ、本事業の交流状況や実施するカリキュラム情報、学生の研究成果、留学体験記等を広く公開。

■ ゲッドプラクティス等

- ・新科目の開講
- ・積極的な広報活動
- ・三大学による合同ワークショップを開催
- ・キックオフシンポジウムを開催
- ・連続講演会“Waseda meets Global Leaders”を開催



〈2017.4.19 三大学合同ワークショップ〉



〈2017.4.20 キックオフシンポジウム〉

2. 取組内容の進捗状況(平成29年度)

【事業の名称】(選定年度28年度・タイプA-② CAMPUS Asia)

「多層的紛争解決・社会変革のためのグローバルリーダー共同育成プログラム」



■ 交流プログラムの実施状況



〈2017.8.9 サマースクール グループワーク@本学〉

- ・4月よりキャンパス・アジア専任の教員を雇用し、紛争解決・社会変革に係る「キャンパス・アジア科目」を留学センターに開講、150名以上の学生が科目を履修。加えて、より深く学びたい学生向けに、全学部と協議し、各学部から2-3科目を「キャンパス・アジア関連科目」として設定した。
- ・中・長期留学については、平成29年度中にパイロットケースとして交流を行い、サマースクールとウィンタースクールで、北京大学・高麗大学から短期留学生を受け入れた。
- ・新規ウェブサイト立ち上げ、リーフレットの作成等により科目や留学プログラムを積極的に広報した。また、7月に迎春出発の、4月に秋出発のキャンパス・アジア留学説明会をそれぞれ実施し、北京大・高麗大でも同様の広報活動を実施した。
- ・セミナーや特別授業の際には、学内の他の留学プログラムと連動し、大学全体でセミナーの広報を実施した。
- ・12月に派遣留学生のオリエンテーション、平成30年5月に受入留学生の歓迎座談会を実施し、キャンパス・アジア学生同士の連携を深め、情報共有する機会を提供した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

3大学間の合意で、正式な留学プログラムの開始は平成30年春からとなったが、パイロットケースとして、平成29年9月から北京大へ2名、高麗大へ2名、計4名の学生を長期派遣した。その際航空券の支給による学生支援を行い、当該学生たちは、受入大学でキャンパス・アジア科目の履修をしている。

○ 外国人留学生の受入

派遣同様、パイロットケースとして、平成29年9月から北京大より1名の長期留学生を受け入れた。当該学生は、本学で積極的にキャンパス・アジア科目を履修し、キャンパス・アジア学生の良きモデルとなっている。また、サマースクール(東京・長崎)・ウィンタースクール(東京・岩手)の際、中国より計11名、韓国より計9名の短期留学生を受け入れた。その際、受入留学生全員にJASSO奨学金を支給することができた。また、平成30年度春からの受入学生には、学生支援として、学生寮費の一部負担を行う。

<タイプA-②>

	H29
日本(J)での受入	C 1 K 0
中国(C)での受入	J 2 K 0
韓国(K)での受入	J 2 C 0

※上記数字は3ヶ月以上の中長期留学のみを計上
 ※短期留学(サマー・ウィンタースクール)の「日本(J)での受入」人数: C11, K9
 ※学内全プログラムを総合すると、北京大へ36名・高麗大へ4名を長期派遣しており、北京大から26名・高麗大から14名を長期受入している。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- ・Program Committee(PC)を各大学で年2回開催し、学内委員の意見を取り入れた。
- ・Inter-Campus Program Committee (ICPC、各大学2名以上の教員と職員より構成)を3大学間で定期的に2か月毎、対面またはスカイプで開催し、大学間交流の枠組形成等につき協議した。
- ・先進諸機関より専門家を招聘し、外部からの意見やアドバイスをいただき、プログラムの質を保証した。
- ・先進諸機関より専門家を招聘し、本学・北京大・高麗大教職員対象に、新しい教育手法の導入に向けた合同ワークショップを4月、7月、2月に開催した。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

- ・Facebook・TwitterといったSNSのみならず、新規に事業のウェブサイト(日本語・英語)を立ち上げ、課題であった在中国の北京大学学生・教職員とも情報共有できるように整備した。
- ・12月より毎月ニュースレターを発行し、キャンパス・アジア科目登録学生、留学生、3大学関係者にメールで配信している。
- ・留学前の外国人学生や留学中の日本人学生がこれらの情報媒体を通じて常に最新の情報にアクセスすることができ、またウェブサイトを通じていつでも事業に関する質問をすることができる環境を整えた。



〈2018.2.9 ウィンタースクール企業訪問@岩手・釜石〉

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況

情報の公開、成果の普及

- ・本事業のために英語力に優れた職員を1名雇用するとともに、学部事務局・国際部・留学センターが密接に協力・連携しつつ、内部チェック機能を有する相互補完的な全学運営体制を構築した。
- ・ウェブサイト・Facebook・Twitterを立ち上げ、本事業の交流状況や実施するカリキュラム情報、留学体験記等を広く公開した。

■ グッドプラクティス等

- ・紛争解決・社会変革に係る「キャンパス・アジア科目」の新規開講
- ・サマー・ウィンタースクールの開催
- ・3大学合同のキックオフシンポジウム、3大学教職員対象FDワークショップを3回、連続講演会“Waseda Meets Global Leaders”を6回開催
- ・新規ウェブサイト・Facebook・Twitter、リーフレット・ニュースレターを通じた積極的な広報活動



〈2018.5.15 第7回 Waseda Meets Global Leaders〉



〈2017.9.20 第5回 ICPCミーティング@高麗大学校〉

3. 取組内容の進捗状況(平成30年度)

【多層的紛争解決・社会変革のためのグローバルリーダー共同育成プログラム】
 (選定年度28年度・タイプA-② CAMPUS Asia)



■ 交流プログラムの実施状況



〈 H30.7 サマープログラム@高麗大学校 〉



〈 H30.8 サマープログラム@本学 〉



〈 H31.2 スプリングプログラム@岩手 〉

- ・本事業は本格開始3年目を迎え、キャンパス・アジアコア科目・関連科目の履修学生数が増大した。
- ・ダブルディグリー(以下DD)・副専攻・インテンシブの中長期留学生数は派遣24名、受入11名で、短期留学生数は派遣4名、受入22名であった。
- ・3月に3大学協同の修了証を授与する修了式を行った。

〈タイプA-② 中長期留学生数〉

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

- ・平成30年秋学期より北京大へDD14名・インテンシブ5名、高麗大へインテンシブ5名、計24名を中長期派遣した。
- ・平成30年7月の高麗大サマープログラムへ4名を短期派遣した。

○ 外国人留学生の受入

- ・平成30年春学期より北京大からインテンシブ1名、高麗大からDD3名・インテンシブ7名、計11名を中長期で受け入れた。
- ・平成30年8月のサマープログラム(東京・広島)到北京大から1名、高麗大から2名、2月のスプリングプログラム(東京・岩手)到北京大から14名、高麗大から5名、計22名を短期で受け入れた。

	H30
日本(J)での受入	C 1 K 10
中国(C)での受入	J 19 K 0
韓国(K)での受入	J 5 C 0

※ 短期留学(サマー/スプリングプログラム)
 「日本(J)での受入」人数: C15、K7
 「韓国(K)での受入」人数: J4、C2

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- ・プログラム委員会(PC)の継続的实施と共に、3大学合同委員会(ICPC)を2ヶ月毎に実施した。特に紛争解決と社会変革という基本理念に沿った更なるカリキュラム整備を各大学並びに3大学協同で進めた。
- ・先進諸機関より専門家を招聘し、外部評価委員会(アドヴァイザリーボード)の委員へ就任依頼した。
- ・各大学の事業責任者・担当教員が相互訪問し、学生向けに直接的な広報を行い大きな成果を収めた。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

- ・受入学生と派遣予定学生のために長期留学生歓迎座談会を実施し、双方に情報交換の場を提供した。
- ・留学帰国報告会を実施し、派遣学生から留学先での成果・率直な課題を聞き取り、次回派遣のための環境整備を行った。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況 情報の公開、成果の普及

- ・大学の国際化を推進するための中核的事業と位置づけ、留学センターと各学部が協力して事業の広報を進めた。5月のウェブサイトリニューアル以降、着実なプレゼンスの高まりを実感している。
- ・朝日新聞社、毎日新聞社から取材を受け記事として各種媒体にて掲載された。また、担当教員と学生がラジオ番組で当事業やアジア留学について広報した。
- ・担当教員が当事業の成果を『ワセダアジアレビュー』にて「平和構築プロセスとしてのキャンパス・アジア事業」として発表した。

■ グッドプラクティス等

- ・ICPCミーティングやモニタリングへの対応準備を通じて、3大学合同による事業の問題点の洗い出しとその改善に向けた方向性の確認が進んだことが最大の成果である。また、語学の選抜基準の見直しや北京大における英語科目の拡充も特筆すべき成果である。
- ・平成31年4月から「キャンパス・アジア学生ランチ」の場を隔週で提供した結果、幅広い学部から日中韓に関心を持つ学生が情報交換を行う貴重な機会となっている。



〈 H31.4 キャンパス・アジア学生ランチ@本学 〉

4. 取組内容の進捗状況(令和元年度)

【多層的紛争解決・社会変革のためのグローバルリーダー共同育成プログラム】(選定年度28年度・(タイプA-② CAMPUS Asia))

■ 交流プログラムの実施状況



〈R1.8 サマープログラム@本学〉



〈R1.8 北京学生フォーラム@北京大学〉



〈R2.2 スプリングプログラム@本学〉

- ・募集回数の増加や応募要件の見直し、さらには積極的な広報活動により、プログラム参加学生数が増大した。
- ・中長期留学生数は、派遣39名、受入31名で、短期留学生数は派遣10名、受入21名であった。
- ・令和2年2月にアラムナイ&エキスパートネットワーキングミーティングに外部講師3名を招聘し、アラムナイ・現役学生・関係教職員計100名が参加し交流会を実施した。
- ・紛争解決・社会改革に係る科目を、本学の全学生を対象とする副専攻プログラム (Conflict Resolution: From Asia's Perspective)として令和2年度より実施することになった。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

- ・令和元年9月北京大へ30名、高麗大へ6名を中長期派遣した。令和2年2月北京大へ3名、高麗大へ9名を派遣予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大により、北京大3名は渡航前に中止となり、高麗大9名のうち6名は渡航後留学を断念した。
- ・令和元年8月の北京大での「北京学生フォーラム」へ10名を短期派遣した。
- ・令和2年2月実施予定だった「ソウル学生フォーラム」へ10名短期派遣予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大により、令和2年8月延期開催予定となった。

○ 外国人留学生の受入

- ・平成31年4月北京大から5名、高麗大から3名、令和元年9月北京大から17名、高麗大から6名を中長期で受け入れた。
- ・令和元年8月のサマープログラム(東京・神奈川・静岡)到北京大9名、高麗大6名を短期で受け入れた。令和2年2月のスプリングプログラム(東京・千葉)には、当初北京大6名、高麗大7名の受入予定だったが新型コロナウイルス感染拡大により高麗大6名のみを受け入れた。

<タイプA-②>

	R1
日本(J)での受入	C 22 K 9
中国(C)での受入	J 30 K 0
韓国(K)での受入	J 9 C 0

※短期留学
(サマー/スプリングプログラム)
「日本(J)での受入」人数: C9、K12
「中国(C)での受入」人数: J10、K5

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- ・プログラム委員会(PC)の継続的実施とともに、3大学合同委員会(ICPC)を2ヶ月毎に実施した。中長期留学プログラムおよび短期交流プログラムの実務的協議を重ね、3大学合同でプログラムの発展的展開を図った。
- ・先進諸機関より専門家を招聘し、令和元年10月に第1回外部評価委員会(アドバイザリーボード)を実施した。
- ・3大学共同のプログラム・留学説明会等の機会を通じて、学生向けに直接的・積極的な広報を行い大きな成果をあげた。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

- ・受入学生と派遣予定学生のために長期中学生歓迎座談会を実施し、双方に情報交換の場を提供した。
- ・留学体験報告会を実施し、派遣学生から留学先での成果や率直な課題を聞き取り、次回派遣のための環境整備(例えば科目登録や学生寮等)を行った。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況 情報の公開、成果の普及

- ・大学の国際化を推進するための中核的事業と位置づけ、関連科目の副専攻化を図った。
- ・ニュースレターの発行とともに、定期的なウェブサイトの内容更新やSNSを通じた情報発信を行い、事業の広報を確実に進めた。特にウェブサイトには、卒業生(アラムナイ並びに短期プログラム参加者)のインタビュー記事を掲載しキャンパス・アジアの成果を普及している。
- ・当事業の取組や成果、教育手法等が記事として掲載された。(『毎日フォーラム』「早大が「アジアと学ぶ」事業:紛争解決・社会変革のためのリーダー育成」(2019年4月号) “Unconventional Approaches to Research and Teaching at Waseda University Promote Mutual Understanding”, Advertorial, Science(367号 2020年1月))

■ ゲッドプラクティス等

- ・講演会“Waseda Meets Global Leaders”開催で実務家(令和元年7月 国連事務局アプリカ担当事務総長特別顧問室(UNOSAA) ラウル・デメロ・カブラル氏、令和元年11月 環境省 自然環境局生物多様性戦略推進室 柳谷 牧子氏)との接触の機会を提供することで、学生のキャリアプラン構築に役立てた。
- ・月二回の学生主体のランチミーティングをはじめ、学生フォーラムやアラムナイイベントにも多くの学生が参加することにより、キャンパス・アジア学生としてのコミュニティ意識も醸成され、学生からの積極的な課外活動(フォトコンテストの企画、アラムナイ事務局の設置提案)の活性化が促進された。尚、令和2年度に入ってから、学生主体のランチミーティングの場をオンラインに移動し毎週行い、数名の教員が日中韓学生の近況報告や相談を受けつつ、オンライン学生ワークショップの準備をしている。



〈R2.2 高麗大校舎・本学共催
アラムナイ&エキスパート
ネットワーキングミーティング@本学〉

5. 取組内容の進捗状況(令和2年度)

【多層的紛争解決・社会変革のためのグローバルリーダー共同プログラム
(選定年度28年度・(タイプA-② CAMPUS Asia))



■ 交流プログラムの実施状況

- ・紛争解決・社会変革に係る科目を、本学の全学生を対象とする副専攻プログラム (Conflict Resolution: From Asia's Perspective)として開講した。
- ・コロナ禍の影響によりあらゆる留学プログラムが原則中止となったなか、三大学の協働のもと様々なオンラインプログラム (学生フォーラム、連続講義、ピッチコンテスト)を開発・実施し、3大学間の学生交流や学習機会の提供を継続した。
- ・修了者は令和2年9月に14名、令和3年3月に13名となり、修了証授与式をオンラインで実施した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

・令和2年度の派遣候補学生は、当初、北京大へ37名、高麗大へ19名であった。コロナ禍の影響により渡航を伴う留学が困難となったが、個々の学生への対応をきめ細やかに継続し、北京大へ10名(うち7名はオンライン留学)、高麗大へ7名を派遣した。

○ 外国人留学生の受入

・令和2年度の受入候補学生は、当初北京大から28名、高麗大から24名であった。コロナ禍の影響により渡航を伴う留学が困難となったが、北京大から8名(すべてオンライン留学)、高麗大から7名(うち2名はオンライン留学)を受け入れた。

・留学を断念した学生たちの要望も受け、令和2年度秋学期に3大学によるオンラインプログラム「CAMPUS Asia from Home」を立ち上げた。3大学の教員による講義シリーズや3大学の学生によるピッチコンテストシリーズを実施し、計46名(早稲田大31名、北京大14名、高麗大1名)が参加した。

<タイプA-②>

	R2
日本(J)での受入	C 8(8) K 7(2)
中国(C)での受入	J 10(7) K 0
韓国(K)での受入	J 7 C 0

カッコ内はオンライン留学による数値

※短期留学(すべてオンライン)
(夏季/春季集中講座参加数)
J22、C18、K4

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- ・プログラム委員会(PC)の継続的实施とともに、3大学合同委員会(ICPC)を2ヶ月毎に実施した。コロナ禍による危機的な状況に迅速かつ柔軟に対応するべく、ICPCを中心とした3大学による密な協議・連携を重ね、オンラインプログラムを開発・実施した。
- ・先進諸機関より専門家を招聘、令和2年9月に第2回外部評価委員会(アドバイザーボード)を実施し、オンラインによる学生交流や授業展開に関する知見を得て、オンラインプログラム「CAMPUS Asia from Home」および秋学期の活動へ反映させた。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

- ・令和2年度春学期からは、受入学生や派遣予定学生だけでなく、コロナ禍の影響により留学を断念した学生も交えて、オンライン上で学生ランチミーティングを毎週実施し、キャンパス・アジア学生の交流機会の提供を継続した。
- ・あらゆる留学プログラムが原則中止となった状況下でも、学生個々人の留学意思を尊重し、3大学間の調整・連携のもと、オンライン授業履修によるプログラム参加や渡航の延期、プログラム期間の短縮などの柔軟な代替措置を提示し、学生の派遣・受入の環境を最大限に整備した。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況 情報の公開、成果の普及

- ・大学の国際化を推進するための中核的事業と位置づけ、関連科目の副専攻化を行い、関連科目の持続的提供を可能にした。なお、当副専攻は英語のみでも修了可能となっている。
- ・令和3年7月に延期された中国・紹興市での最終シンポジウム「元培フォーラム」において、3大学による本事業の最終報告を行い、その結果を広く内外に広報する予定である。

■ ゲッドプラクティス等

・令和2年8月、オンラインによる夏季集中講座を開催した。3大学による講義動画のオンデマンド配信と同期型学習(Zoomディスカッション・成果発表会)を組み合わせた夏季集中講座を、本学の学習プラットフォームのWaseda Moodleとzoomを活用して実施した。北京大・高麗大の教職員や学生にもWaseda Moodleへのアクセス許可を与え、より一体感のあるオンライン上の教育空間を構築した。なおこの取り組みは、その革新性と教育効果が高く評価され、令和2年度、本学の卓越した教育方法を表彰するWASEDA e-Teaching Awardを受賞することとなった。

・さらにこの取り組みを発展させる形で、令和2年度秋学期に、留学を断念した学生をメインターゲットにしたオンライン交流プログラム「CAMPUS Asia from Home」も開発・実施した。このプログラムでは連続講義とともに、社会変革に関わるピッチコンテストも外部有識者を講師として招聘し実施された。3大学から計46名(早稲田大31名、北京大14名、高麗大1名)が参加した。プログラム修了者を中心に、アラムナイグループ「WAPEKO」が形成され、現役学生も対象にした活動が自主的に展開されている。また、本学校友会として「キャンパス・アジア稲門会」も構成され、上述の「WAPEKO」とともに連携し、本事業終了後も日中韓の長期的なネットワーク構築・拡大につなげていく。

